

ヘーゲル『大論理学』研究 1

伊 藤 一 美

Über Hegels „Wissenschaft der Logik“ 1

Kazumi ITOH

絶対知は精神の経験の旅の終局において登場したもので、絶対者の知であった。絶対者と意識との統一、絶対者となった意識のことであった。絶対者は『現象学』の過程において各対象となって現象しており、諸現象、諸事実、非本質的なものをも自己自身として、自己の他在とするものである。他者をも自己として把握する知が絶対知である。概念把握する知が絶対知である。絶対知とは、絶対者そのものについての知であり、絶対者の自己と自己自身との同一性である。そこにはいかなる媒介もない。だから、絶対知は純粹知である。

この絶対知、純粹知か、自己とは何であるかを語るのが『大論理学』である。何から語るか。絶対知は、いま現われたばかりである。「ただある」。ここから語るしかない。こうして、まず「ある」、「存在」ということについて自己の知を語ることになる。

1. 存在 Sein

A 存在

純粹知は「ただある」。「存在」にすぎない。なんの規定ももたない。どのようにあるかも、まだ解らない。他者とどうちがうか、またどの点が等しいのかも不明である。ただそれ自身にすぎず、どのような内部事状かも不明である。ただ自己自身に等しいだけであり、自己の内部に対しても、外部に対しても差異をもっていない。全く「無规定的な直接態」である。

だから、「存在」は空虚である。直観すべき何ものもない。思考すべき何ものもない。純粹な、空虚な直観作用のみがある、ということになる。それが「存在」だ、ということにもなる。かくして「存在」とは無だ、ということになる。「無以上でも無以下でもない⁽¹⁾」。それ

は純粹無である。

B 無 Nichts

無とは、規定や内容がないということである。つまり、それ自身の中に区別がないことである。完全な空虚である。直観すべき、思考すべき何ものもない。ただ、直観作用、思考作用のなかに無がある、といえる。「無は空虚な直観作用、および思考作用そのものであり、そして純粹存在と同一の空虚な直観作用、または思考作用である⁽²⁾。」だから、無といっても虚無ではない。どういふものかその規定を語ることができない存在のことである。無とは純粹存在のことである。

C 成 Werden

こうして純粹存在と純粹無とは同一のものであることになる。それは、うえてみたように、存在が無へと、無が存在へと「移行してしまっている⁽³⁾」ということである。つまり、一方が他方のもののなかで消失してしまっている、ということである。だから、両者は区別をもちつつも同一である。区別なき同一ではなく、同一なき区別でもない。このように、「一方が他方のなかで直接に消失するという運動⁽⁴⁾」は成 Werden である。

「成は存在と無との統一である⁽⁵⁾」。しかし、存在と無とがとけ合って一つのものとなっているのではない。一つのものであるが、別々でもある。「存在も無も存在している統一である⁽⁵⁾。」「一定の統一」である。これを「規定された統一 diese bestimmte Einheit⁽⁵⁾」という。だから、この統一においては存在と無とはそれぞれが独立して存在しているのではない。揚棄されたものとしてある。絶対的に独立し、相互に無関係にあるのではなく、他者があって自己があり、統一があって互いがあるという関係になっている。つまり、存在と無とはこの統一では、統一の契機としてある。もちろ

ん、契機というのは要素ではない。動的なのである。つまり、存在は無への関係としての存在であり、無は存在に関係するものとして無である。だから契機といっても、存在と無とがそれ自体として契機だというのはない。それらは、無から存在へと、存在から無へと移行するというかたちで契機である。

かくて、成は生成運動と消滅運動という二重の規定をもつことになる。だが、無が存在へと、存在が無となるということで終るのではない。さらに存在が無へと、無が存在へと移行し合う運動として成はある。だから、二つの運動といっても、一つのものである。これが成である。

存在と無とが相互に他者との関係のなかに統一されてあるのだが、このような状況のなかで、他者との関係のなかで相互に他者へと移行しあう。これが成、Werden、生成である。「それぞれがみずから本来的に自己を揚棄する、こうしてそれ自身のものでそれ自身の反対のものなのである⁽⁶⁾」。ここに、存在と無との統一がある。「したがって、成は存在と無の統一への移行運動である⁽⁷⁾」。それは、存在と無との直接的統一である。この統一が定在 Dasein である。

2. 定在 Dasein

A 定在そのもの Dasein als solches

(1) 定在一般 Dasein überhaupt

定在は「規定された存在」である。ただの存在ではない。一定の場所にある存在である。というのは、一定の規定性をもっているということである。一定の場所にあるといえ、外的・形式的なことをいい表わしているにすぎないようだが、そうではない。内容的に一定だということである。定在は、いま自己のなかに自己でないものをもっている。先きの次元で言えば無である。今、存在と無とは一つになっている。これが定在なのだが、この次元では、無は無としてではなくある。いまは存在との相関関係のなかにあるのだから、非存在としてある。定在とは非存在をともなった存在である。だから、存在より内容がはっきりした、しぼられたものなのである。このことを「規定されている」という。だから、定在は「規定された存在⁽⁸⁾」bestimmtes Sein、「一定の存在」なのである。「一定の場所にある」とはこういうことだ。論理的な場所のことだといえる。

(2) 実在性

ところで、定在は非存在をともなった存在である。このことから次のようなことが言える。すなわち、第一に定在は「存在としての統一」、「存在的な定在」、存在に視点をおいたものといえる。他方、「非存在としての定在」ともいえる。すなわち、定在は非定在 Nicht-dasein でもある。これは、定在ではないということではなく、非定在という定在なのである。だから、非定在とは純粹無ではない。「というのは、それは定在の無としての無であるから⁽⁹⁾」。非定在はそれ自身が有るものなのである。「それは、存在的な非定在である。そして存在的非定在はそれ自身が定在である⁽⁹⁾」。定在は他のものとしてある。「定在は本質的に他在である⁽⁹⁾」ということになる。

定在は他在 Anderssein へと移行した。このようにいうと一つの定在に対して、他在なるもう一つの定在が現われたように思われるかも知れない。しかしそうではない。「他者とはこれでないものである⁽¹⁰⁾」Anderes ist Nichtdiß。他者とはこのものの diß の否定 Nichtなのである。このものであるが、ない。このものでないこのものである。だから、このものは、やはりひとつの他者である。したがって、このものでないものである。このものは、同時にこのものでないものといえる。同時に他在でないような定在はありえない。「否定的関係をもたないであろうような定在はない⁽¹⁰⁾」。定在は本質的に他在である。別のものが定在の外に対峙してあって定在が他在なのではない。他在とは定在自身のことである。このとき、定在は他在へと移行している。他在はそれ自体で他在となっている。「その外にみいだされるものへの関係⁽¹¹⁾」から、他在なのではない。他者（他在）それ自体としてある。「他者（在）はそれ自身の他者である⁽¹¹⁾」。つまり、他者とは定在に対立した他在ではない。ということは「他在はそれ自身が定在である⁽¹⁰⁾」ことになる。他在とは非定在である。非定在という定在である。

こうして、結論として次のことがいえる。「定在はその非定在のなかで自己を維持している。定在は本質的に非定在と一つであり、また本質的にそれと一つでない⁽¹¹⁾」つまり、定在とは他在との関係そのものである。そして、「他在は、同時に本質的に定在のなかに含まれており、また同時に定在から分たれてもいる⁽¹¹⁾」。他在とは定在であって定在でない。非定在である。他在とは定在のあり方である。定在とは他在へと移行して行くものであるということである。この意味で、定在は

他在である。この他在を向他存在 *Sein=für=Anderes* という。定在か他在となっていくということである。だから、向他存在とは定在のことである。

定在は非存在を自己のうちに含む。その意味で規定された存在である。あるいは直接的なもの、純粋なものでないという意味で否定された存在である。非定在である。他者である。しかし定在はそこですっかり他者になりきって自己喪失しているのではない。定在はその打ち消しにおいて、同時に自己を維持している。だから、定在は自己にありながら他者へと向かってもいる。この点で向他存在である。同時に定在は即自存在 *Ansichsein* でもある。というのは他者へと向かいつつも、そうすることで定在は自己であるから。「定在は他者へのその関係に対立した自己への関係としての存在である⁽¹²⁾」。したがって定在とは即自存在であり、向他存在である。つまり両者の統一である。相互に相手の否定でありながら、相手なしでは有りえない関係であり、その意味で両者の統一である。大事な点は次のことである。定在は非存在をともなった存在であった。定在は非定在であった。だから、自己のなかに他者をもつものである。定在はこの他者へと向かい合っている。この点で向他存在である。でもそういうなかで定在は同時に自己を維持している。定在でありつづける。この点で即自存在である。他者への関係を媒介として自己へと関係している。だから、定在は「反省された定在⁽¹³⁾」 *reflektirtes Dasein* である。こういう定在をヘーゲルは「実在性」*Realität* という。しかし、実在性においては、向他存在と即自存在を反省諸規定というのだが、これら反省諸規定は相互に無関心である。両者は相互に媒介し合いながらも、自己への関係でしかないから。

(3) 或るもの *Etwas*

だが「これらの側面をおのおのの他側面への関係のうちにあるものとしてのみあり、おのおのが他の側面を自己のうちに含んでいる…⁽¹⁴⁾」。だから両者は相互に無関心にとどまりえないのである。だから「それらを揚棄する単一な統一」 *ihre aufhebende einfache Einheit* が出現する。実在性はこのようなものへと移行する。こうなった定在を「自己内存在」 *Insichsein*、あるいは「或るもの」 *Etwas* という。

では自己内存在とはいかなるものか。第一に「即自存在と同様に定在の自己自身への単一な関係である⁽¹⁴⁾」。けれども当然即自存在そのものではない。さき

ほど「向他存在と即自存在とを揚棄した単一な統一」といった。その前には「両者は相互に関係し合い、相互に他の者を含んでいる」といった。つまり、向他存在は他者へと対していながら、そのまっただなかで自己である。ここで向他存在はそれ自身でありながら即自存在となっている。しかし、第二にこのとき即自存在は、もはや直接的な即自存在ではなく、他の契機を自己のものとして自己のうちに持つ即自存在となっている。だから向他存在は揚棄されている。つまり、自己内存在とは向他存在を揚棄した即自存在としてある。これが第二の点である。

こうみてくると自己内存在とは、反省諸規定を否定して統一したものであるということになる。これが或るもの *Etwas* である。ということは定在が「定在するもの」 *Daseiendes* となったことである。より具体的なものになったのである。「定在は向他存在を揚棄する運動として、それが否定的統一というこの点を獲得することによって、それ自身の内部で定在するものへと移行する⁽¹⁵⁾。」つまり、「或るものの存在はその直接性ではなく、他在の非存在に存するのである⁽¹⁵⁾。」他者が揚棄されているということによって、或るものは存するのである。或るもの *Etwas* は根底に否定をもつ。その意味で或るものとは規定されたものである。

B 規定態 *Bestimmtheit*

(1) 限界 *Grenze*

1 ① 或るものは他在という非存在を自己のなかに含んでいる。否定を根底にもつ。だから或るものはより具体的に規定されてきた。「或るものは、第一に一般的に囲みこまれた定在 *ein überhaupt umschlossenes Dasein* である⁽¹⁶⁾」

② 「或るものは、まさに自己へと還帰してしまっているという根拠から、単一な自己内存在である…⁽¹⁷⁾」。次のようにいい切ってもよい。或るものは他在が非存在であるから、他在を含んではない、と。だから「他在は或るものの外にある⁽¹⁷⁾」。しかもこの他者は他の或る者である。だから或るものはこの他の或るものに対して無関係である。他在(者)に関係なく或るものは存在する。③ その本質的理由は、他在の非存在である。ということは、「或るものとは、一つの他者がそれのなかで終わっているということである⁽¹⁸⁾」。

したがって、或るものは三つの契機を含んでいる。① 或るものの非存在・他者はその外にある。② 他者は或るもののなかで終り、或るものはこの他者の非

存在である。③ がこのことは或るものが非存在をもっていることになる。他在の終りと或るもの自身の存在のあかしとして或るものは非存在を自己自身においてもっている。

これは、或るものが限界 Grenze をもっていることである。この限界をもつことで或るものは自分自身を限界づけているのではない。他者を限界づけているのである。というのは、限界は他者の非存在であるからである。

2 しかし、他者も或るものである。だから、先きの或るものが他者に対してもっている限界は、他者の限界でもある。またこの他者の限界は或るものの非存在でもある。こうして限界は或るもの自身を限界づけていることになる。

3 こうして、限界とは非存在として或るものが終ることである。他方、同時に或るものはその限界によって存在するということでもある。とすると或るものがその限界のなかで（によって）あり、かつないということになる。その限り、或るもののある、なしは限界によって分かれ分かれになっている。つまり、「或るものはその定在をその限界の外にもっている⁽¹⁹⁾」。けだし、或るものは限界によって存在するのだから。あるいは、限界の外には或るものはないのだから、或るものはその存在がないことによって在るのだからである。さらに、限界の外では自己がないことによって、限界の内では自己がある。だから、限界の外に、或るものは自己の存在理由をもつ。同じくまた、他者も限界の外にある。つまり、「限界は両者がそこで終っている中間者である⁽¹⁹⁾」。このことは「両者が定在を相互に彼岸に、またそれらの限界の彼岸にもっている⁽¹⁹⁾」ことになる。たとえば、線はその限界、すなわち点の外でのみ線として現われる。面は線の外でのみ面として現われる。

4 しかし、点は線の限界であるだけではない。線は面の限界であるだけではない。線は点ではじまりもする。点は線の絶対的端初でもある。また、線は面の絶対的端初、あるいは要素でもある。点は線の原理ともいえる。限界は、同時に限界づけられているものの原理でもある。「したがって、限界は或るものから区別されない。この「限界という」非存在は、むしろ或るものの根拠であり、或るものをそれが在るところのものたらしめる。限界は或るものの存在をなしている。換言すれば、或るものの存在はその他在を、その否定を越え出ない⁽²⁰⁾」。

(2) 規定態 Bestimmtheit

限界は或るもの自身に属しており、自己内在的なものである。或るものは一定の規定性をもっている。つまり或るものはある規定態である。限界は或るものを規定しているものであるから、或るものは一つの規定態となっている、といえる。「限界は或るものがよってもってそれが存するところのもので在るゆえんのものである⁽²¹⁾。」限界なき或るものはない。それ故、「或るものは規定されたものであり、規定態との単一な直接的な統一のうちにある。それ故、或るものはその規定態のなかで消失している⁽²¹⁾。」だから、この規定態は自己内存在と限界との統一である。しかし、それら両者を自己のうちで揚棄している。こうして、「規定態は、一方では自己へと還帰した限界である⁽²²⁾。」しかし「他方では、自己内存在ではあるが、向他存在へと移行してしまった、あるいは限界としてあるところの自己内存在（或るもの）である⁽²²⁾。」規定態はこうして二重の仕方で規定されている。

規定態はまず第一に、「自己へと還帰した限界」である。だから他者との関係のなかであるのではなく、或るものは他者への関係から自己のうちへとともどっている。あるいは自己のうちへと取りもどされている。したがって、この規定態は自己にのみ関係している。そのように規定されたものである。そのように限界づけられている。しかし、この規定態は他者の非存在である。他者が顕在化していない。この規定態は規定 Bestimmung そのものである。「或るものはこの規定において自己に安らっている⁽²²⁾。」即自的である。しかし、ここでは、限界は「中間者」ではない。限界は或るものだけに属している。限界は或るものの自己自身への関係である。だから、他者との区別が顕在化していない。規定は自己内存在と他者との単一な統一である。他者に無関心である。

しかし規定態は、第二には「向他存在へと移行した自己内存在」、「限界としての自己内存在」である。あるいは「…規定態は（即自存在であるばかりでなく）限界としての向他存在でもある⁽²²⁾。」規定態は向他存在であり、他者（在）である。上述の第一契機では、或るものは還帰した限界という規定をもった規定態であった。或るものは、還帰した限界に規定されたものとしてあった。この規定態は或るものの自己自身への関係であった。或るものは限界そのものであった。あるいは、或るものが自己を限界づけるということでもある。或るものが限界なる他者をもっているというこ

とである。だから、実は限界が或るものに属していたにすぎないのだ。限界は或るもの自体ではなかった。他者にすぎなかった。つまり「或るものは、他者をそれ自身のもとにもっている⁽³³⁾」ことである。こうして、ここでは規定態は或るものの他者、外的定在であることになる。この、或るものの外的定在である規定態を性状 *Beschaffenheit*⁽²⁴⁾ という。だから性状とは或るものの他者性ということである。「この〔性状という〕規定態は、なるほど或るものに属しているが、むしろ或るものの他在である⁽²⁴⁾。」だからそれは偶然的なものとして現われる。規定態はこうした契機・側面でもある。

規定とは限界が或るもの自身であることであった。或るものが規定態であるということであった。ここで限界は或るものの自己自身への関係であった。他方性状とは或るものが他在をもっていることであった。規定態が他在としてあるということであった。両者は相矛盾するように思われる。しかしそうではない。前者、「限界が或るものの自己自身への関係」であることによって、或るものが他在をもつのである。或るものが自己性をもつことで、他在が顕在化してくるのである。規定態が規定であることで、同時に規定態は性状でもある。「このように反省された場合の規定態は質 *Qualität* である。質は規定の意味をも性状の意味をも自己のうちに合一している⁽²⁴⁾。」或るものは質として他者への関係によって自己を規定するというかたちで存している。つまり両者は相互に排除しあいながら一つになっている。両者は反省諸規定である。「両者は本質的に同一のものの契機であり、あるいはよりくわしくいえば性状は本来、規定そのもののなかに含まれている限界である⁽²⁵⁾。」

(3) 変化 *Veränderung*

規定態は規定と性状との反省関係である。だから規定態は反省された規定態となった。

性状は或るものにとっての他者（在）であった。つまり或るものにとって、その規定態は他者であった。それ故、「或るものはその規定態においてそれ自身のもとでその非存在である。…或るものの規定態は、その規定態であるとともに同じくその他者である⁽²⁶⁾」。或るものは自己自身でありつつ他者への移行でもある。だから、移行でもあれば還帰でもある。これが変化 *Veränderung* である。だから、変化の「契機とは或るものの自己内存在と他者とである⁽²⁷⁾。」これら両契機は規定においては「単一な統一」*die einfache Ein-*

heit にすぎない。規定とは自己自身への関係でしかないからだ。「だが、性状は相互に他である契機としての、換言すれば区別された契機としての両契機の関係であり、しかも同一の観点における両契機の関係である。それゆえにそれら自身のもとでの両契機の揚棄する運動である⁽²⁷⁾」。だから変化はさしあたり性状においておこる。ところで性状の変化とは外面的なもののように思う。或るものの諸側面のうちの一つが放棄されるというようなことだと思われる。というのは性状とは外的なものだからである。それ故、性状は変化しても、或るものは現存している。規定はこの移行運動のなかで維持されている。あるいは自己内存在という契機が維持されている。したがってさしあたり、性状の変化とはそれがただ他の一つの性状になることにすぎないように見える。しかしいまここでは、性状とは或るものの自己内存在と他者との関係であった。だから、性状の変化といっても性状がただ他の一つの性状になることではない。性状の変化とは性状自身が変化することだ。「変化するのは性状そのものである。……性状はそれ自身が変化なのである⁽²⁸⁾。」変化とは表面的なものではない。変化は或るもの自身に至る。「性状の変化にともなう或るものが変化するのである⁽²⁵⁾」。性状の変化とは、或るもの自身の変化である。というのは、ここでは性状は或るもの自身だからである。

それ故、変化とは或るもの自身のもとにあるその他在である。つまり、或るものの性状はその規定そのものである。そして、他在という外面性は或るものの固有の内面性である。だから、この他在は或るものの即自存在的な内在的な規定そのものである。「この或るものの他在は或るものの即自存在的な規定態である⁽²⁹⁾。」こうして、或るものの他在とは規定そのものであることになる。しかも、規定とは自己へと関係する自己内存在であった。だからこういえる。「自己自身に等しい自己内存在は、その固有の非存在としての自己自身に関係しているのである⁽²⁹⁾。」こうもいえる。いま或るものの他者が規定で、自己内存在だとすれば、この自己内存在は、この自己内存在そのものとして、その限界だということになる。他者は或るものを、その内在で限界づけているのである。他者は或るものを制限 *Schranke* している。「このように或るものの規定をなして、その結果同時にその非存在と規定されている限界は制限である⁽²⁹⁾。」しかし、制限とは自己内存在が非存在としての自己自身に関係することだ。

だから、制限はこえられようとされる。制限とは、それをこえられよう、こえようとするこなしには制限ではない。

制限は、それがこえられるべきものとしてあることよってのみ制限である。したがって、制限は即自的には当為 Sollen である。「限界への、すなわち制限としての自己へのこの関係における規定の即自存在は当為である⁽²⁹⁾。」しかし、当為とは制限が制限としてあることよって成り立つ。こえ出るべしということは、こえ出られない、こえていないことよって成り立つ。だが同時に、こえてい^ていることをも当為成立のためには必要である。「あるべきところのものはあり、かつ同時にない⁽³⁰⁾。」こうして、当為には二重の規定が含まれていることになる。一方では「即自存在的な規定としての規定⁽²⁹⁾」が、他方では「非存在としての、制限としての規定」が含まれている。「あるべきところのものはある」あるいは「こえてい^ている」と制限とが当為の契機である。換言すれば、規定とそれの揚棄とである。「当為は規定であり、しかも規定そのものの揚棄された存在である。しかも……規定における規定そのもののこの揚棄された存在である⁽²⁹⁾。」制限なしには当為はない。「当為は規定のその非存在としての自己への関係である⁽²⁹⁾。」当為は本質的に一つの制限をもっている。したがって、或るものは当為としてあるが、そのなかには制限が含まれている。「或るものは当為としてその制限を越えているが、しかし逆にそれは当為としてのみその制限をもっているのである。両者は不可分である。或るものはそれが規定をもつ、その限りで制限をもっており、そして規定は制限の揚棄された存在でもまたあるのである⁽³¹⁾。」当為は制限の否定であるが、この否定が両者を統一する。というのは、当為は制限とそれの否定とであるからだ。

否定は当為と制限との統一である。あるいは、否定は制限と当為という二重の契機である。すなわち、「第一に、否定は……反省された、即自存在へと関係づけられた否定である。……欠如であり、換言すれば制限である⁽³²⁾。」否定とは、非存在として定立された規定態である。制限でもある。「第二は、当為としての否定は即自存在時な規定態である。……その限りで否定は非存在として、制限として定立されているあの第一の規定態の否定である。したがってそれは否定の否定であり、絶対的否定である⁽³²⁾。」このように、否定とは実在的なものであり、かつ即自存在である。また否定こそ

が他在を揚棄する運動として自己へと還帰する単一なものを成立せしめる。否定は、まず非存在、他在である。次に他在の否定であり、他在の否定として自己自身への関係である。否定と否定の否定とが否定である。この二つの否定は相互に他者であるが、しかし相互に限界づけあっている。というのも制限と当為とを揚棄したのだからである。

C 無限性 Unendlichkeit

(1) 有限性と無限性 Endlichkeit und Unendlichkeit

定在は自己自身にのみ関係しているものだが、同時に自己自身をこえており、しかもそれを否定して自己へと関係(還帰)している。つまり定在とは制限であり、当為である。否定とその否定、すなわち否定の否定とである。

まず第一に、定在は制限であり、否定である。規定されているだけでなく、制限されている。欠如、非存在でもある。「諸物が規定態を含むということだけではなくて、……存在ではなく、むしろ制限としての非存在がそれらの物の本性をなしている⁽³³⁾。」つまり定在は有限 endlich である。しかし、そればかりではなく有限性 Endlichkeit でもある。有限性が定在、有限なもの本性である。「たが(真実においては定在は、)規定されたものは当為においてのみ有限である⁽³⁴⁾。」というのは定在、有限なものが否定としての自己を、自己の制限をこえようとしているかぎり、「こえ出るべし」としてあるかぎり、それはまだ、こえていないのであるから、こうした状況にあるときにのみ有限なものである。つまり、定在が否定であるかぎり有限である。有限なものがそれ自体否定であるかぎり有限である。「有限なものが自己にとって否定であり、非存在としての自己に関係している限りで、したがってそれが制限をまた同じく揚棄しているというその限りで、有限なものは否定である⁽³⁴⁾」。このとき有限なものは有限である。だが、第二に真に有限なものが有限であるのは、つまり否定が否定でありうるのは、すでにのべたが当為、否定の否定においてである。だから、「否定の自己自身へのこの関係のうちには、有限なものの否定を揚棄する運動が、あるいは有限なものの不等性を揚棄する運動が成立している⁽³⁵⁾。」これが有限なもの本性・規定態である。その「規定態は、そのなかに同時に自己自身への関係が、自己との相等性が、制限を揚棄する運動が現存しているその限りでのみ、否

定でありかつまた有限性である⁽³⁵⁾。」つまり有限なものなかに、自己を否定するものが内在している。「有限なものは、それ自身がこの自分自身を揚棄する運動である⁽³⁵⁾。」ということは、有限なものが無限なものだ、ということである。

この結果、無限なものの概念が明らかとなった。「無限なものは他在の他在、否定の否定であり、規定態を揚棄する運動を通じての自己への関係である⁽³⁵⁾。」無限なものは当為そのものだということになる。だが、当為は制限なしではない。それ故、有限なものなしに無限なものはない。無限なものはそれ自体ではありえない。有限なものがあることによって始めてあり得る。有限なものは、むしろ無限なものになる。「自己をこえてゆくこと、否定を否定して無限になるということは一般に有限なものの本性である⁽³⁵⁾。」というのは、すでにのべたように有限なものなかに「有限なものの否定を揚棄する運動⁽³⁵⁾」が内在しているからである。「有限なものは、もっぱらそれ自身がその本性を通じて無限なものになるということにすぎない。無限性が有限なものの規定である⁽³⁶⁾。」無限性とは、有限なもののもう一つの本性だということである。

(2) 交互規定 Wechselbestimmung

無限性とは有限なものの規定である。だが、無限性からいえば、それは規定されたものである。だから、他者への関係である。この他者とは有限なものである。ここで有限なものとは無限なものとは「一方は即自存在的な否定であり、他方は非即自的存在的なものとしての否定、非存在としての、揚棄されたものとしての否定である⁽³⁶⁾。」二つの否定はことなる。有限なものは自己を否定しつつも自己を保存している。直接的否定である。しかし無限なものは否定の否定である。ここに対立がある。次のようにもいえる。有限なものは、非存在、欠如、制限である。だから、それを揚棄する当為でもある。その意味で無限なものである。しかし、制限があって当為もあるという関係である。それ故、制限も揚棄されていつつも揚棄されず、当為と対立している。つまり、「有限なものはまだ本当に揚棄されおらず、無限なものに対立したままである。同じように無限なものは有限なものを真に自己のうちへと揚棄してしまっておらず、それを自己の外にもっている⁽³⁹⁾。」有限なものとの対立においてある無限なもの、無限なものとの対立にある有限なものがあるだけである。両者は相互に外にある。相互に外的関係ではない。

しかし、真実においては両者は相互に関係づけられている。「それぞれが他方の限界であり、この限界をもつということをもっぱらその本質としている⁽³⁹⁾。」真実においては両者は統一されている。両者が相互に他者を限界としてもっているから。「両者の概念としての統一は当為と制限とがそこにおいて同一のものとしてあり、有限性と無限性とがそこに源を発する規定である。けれどもこの統一はこの規定の他在のなかでかくされてしまっており、ただ根底に存するにすぎない内的統一である⁽³⁸⁾。」両者の統一は内的にはあっても顕在化しない。というのは、まだ両者が外的関係、分離されている状態にまだあるからである。だから両者は他方を他者としてもっているのではあるが、自己の非存在としてもっているにすぎない。他者を自己からつき離している。だから両者の関係は、実在性としての有限性と否定として無限性の関係でしかない。両者は他者の関係でしかない。有限なものは無限なものにとって他者でしかない。ということは、無限なものは有限なものがあつての無限なものとなる。そういう無限なものは有限なものでしかない。つまり、いままでの無限なものとは有限なものでしかなかったことになる。だからこういえる。無限なものの自身が制限されている。そこに限界が成立している。ということは、無限なものがふたたび揚棄されて、そこには無限なものの他者、有限なものが出現しているということである。つまり無限なもののそれ自身が有限なものとなっている。これはすでに揚棄されたものである。しかし、この新しい限界は揚棄されるべきであり、こえてゆかれざるを得ない。だが同じことがくりかえされる。こうしたことが無限に進行する。ここに、「有限なものと無限なものとの交互規定 Wechselbestimmung」が現存する⁽³⁹⁾。」交互規定は有限なものと無限なものとの戯れ Spiel である。けだし「有限なものは当為への、または無限なものへの関係においてだけしか有限でないし、また無限なものは有限なものへの関係において無限であるにすぎない。両者は端的に相互に他者であり、そしておのおのそれ自身のもとにその他者をもっている⁽³⁹⁾」からである。「のりこえて出る運動自身はのりこえて出られない」という悪無限性だけがある。これはくりかえされる当為である。これは有限なものをもった無限なもので、有限なものによって限界づけられており、それ自身が有限である。

(3) 無限性 Unendlichkeit

ところが、この交互規定のうちに無限なものの真理

態がすでに存在している。それは有限なもの無限なものとの統一がそこにすでに存在し、この統一がそれらを揚棄しているということである。つまりそれらの分離がすでに揚棄されているということである。すなわち、当為は制限があってはじめてあり、制限は当為があってはじめてあるというとき、両者が相互に外にあるのではない。制限のなかに当為があり、当為のなかに制限があると考えねばならない。有限なものがある無限なものがあるのだが、両者は外的関係ではなく内的関係なのである。自己のなかにそれぞれが他者をもつ。「有限性のなかには無限性が、有限性の他者が含まれている⁽⁴⁰⁾。」無限なものの中にその他者・有限なものが含まれている。両者はしたがって本質的にそれらの他者を含んでおり、それゆえにそれらのもとでそれら自身の他者である。「おのおのは、それ自身のもとでこの統一であり、かつそれ自身を揚棄する運動である⁽⁴⁰⁾。」したがって、有限性も無限性も「自己をこえ出る運動」としてのみ存在している。「有限なものはその外に存するとしての無限なものによって揚棄されるのではなく、有限なものの無限性は自己自身を揚棄するということに存する⁽⁴⁰⁾。」しかし、そのように自己自身をこえ出つつ、有限なものは自己を保ちつづけてもいる。自己超出が同時に自己還帰である。だから「自己自身による自己揚棄」なのである。このことを無限性に定位して語ればこうなる。「無限性は……それのもとにおいてその他者である。そしてこの他者はその逃亡からよびもどされており、それゆえにまた空虚な他在の他在として、否定の否定としてあり、自己への還帰、自己自身への関係である⁽⁴⁰⁾。」

「だからして、有限なものも無限なものも……おのおのはそれ自身のもとにおいてその反対のものであり、こうしてその他者との統一である⁽⁴⁰⁾。」ここに真の無限性が出現している。有限性も無限性も揚棄され真理態が現われている。真の無限性が両者の真理態である。「それは他在をこえ出てゆく運動のうちに成立しており、自己自身への還帰としてある⁽⁴¹⁾。」これが「自己への否定的関係としての自己自身に等しい存在⁽⁴¹⁾」である。これを向自存在 *das Fürsichsein* という。

(つづく)

90 頁、(訳文は多少の変更あり) Hegel; „Wissenschaft der Logik“ (Erstausgabe, Wieland 版) S. 22. (以下引用は両書より)

- (2) 90 頁, S. 23.
- (3) 91 頁, S. 23.
- (4) 92 頁, S. 23.
- (5) 112 頁, S. 43.
- (6) 113 頁, S. 44.
- (7) 114 頁, S. 45.
- (8) 118 頁, S. 48.
- (9) 119 頁, S. 49.
- (10) 120 頁, S. 50.
- (11) 121 頁, S. 51.
- (12) 122 頁, S. 52.
- (13) 123 頁, S. 53.
- (14) 128 頁, S. 58.
- (15) 129 頁, S. 59.
- (16) 130 頁, S. 60.
- (17) 130 頁, S. 61.
- (18) 131 頁, S. 61.
- (19) 132 頁, S. 63.
- (20) 133 頁, S. 64.
- (21) 134 頁, S. 65.
- (22) 135 頁, S. 66.
- (23) 136 頁, S. 66.
- (24) 136 頁, S. 67.
- (25) 137 頁, S. 68.
- (26) 138 頁, S. 69.
- (27) 139 頁, S. 70.
- (28) 140 頁, S. 71.
- (29) 141 頁, S. 72.
- (30) 141 頁, S. 73.
- (31) 142 頁, S. 74.
- (32) 146 頁, S. 77.
- (33) 147 頁, S. 79.
- (34) 148 頁, S. 79.
- (35) 148 頁, S. 80.
- (36) 149 頁, S. 81.
- (37) 150 頁, S. 82.
- (38) 151 頁, S. 83.
- (39) 152 頁, S. 84.
- (40) 154 頁, S. 86.
- (41) 155 頁, S. 87.

注

- (1) ヘーゲル『大論理学』第一版、寺沢訳(以文社)